

# 交通社会の諸問題を解決する質的・個性記述的研究の現状と今後

企画・話題提供者：大谷 亮 ((一財) 日本自動車研究所)  
司会・話題提供者：小菅英恵 ((公財) 交通事故総合分析センター)  
話題提供者：中西 誠 (株式会社電脳)  
話題提供者：中野友香子 (科学警察研究所)  
キーワード：道路交通社会・質的/個性記述的研究

## 【企画趣旨】

交通社会の諸問題を解決する交通心理学の役割として、運転適性検査の開発と運転者選択、交通参加者への教育や啓発、人間特性に基づく自動車や道路交通環境の設計、法規や基準または標準の制定等の様々な貢献がある(宇留野, 1972)。

2023年度の自主企画ワークショップ(WS)では、道路交通社会を具体例とした応用心理学研究について議論し、理論と実践のバランスや、人間を「測ること」と「変えること」の難しさを共有し、今後の方向性について検討した(大谷・小菅・中西・中野, 2023)。また、2024年度のWSでは、2023年度の議論を踏まえ、下げ止まりとなっている交通事故の更なる低減を目指し、代表値や散布度等を用いたこれまでの量的・法則定立的な研究や取り組みに加え、質的・個性記述的研究の意義や方法論について議論することを企図した(大谷・小菅・中西・中野, 横井川, 2024)。

本企画では、交通社会の諸問題を解決するための質的・個性記述的研究の現状について話題提供者よりご報告いただき、交通事故低減等の各種の諸問題を解決するための情報を収集する。また、質的・個性記述的研究の現状と今後の課題や方向性を整理することを主として、話題提供者間の質疑応答の後、フロアの皆様との領域を超えた議論を行う予定である。

## 【話題提供】

### ●小菅英恵 ((公財) 交通事故総合分析センター)

2024年度は量的研究者の立場から、普遍的な法則だけでは解決が難しい高齢運転者の安全支援の研究を事例に、介入相手の体験や意識を深く理解する個別対応の重要性について話題提供を行った。このように現在の交通社会における質的研究および個性記述的研究はますます重要な役割を担うと考えられる。しかし、未だ事例や質的研究は科学的でないという見方や、自然言語処理技術を用いた解析は科学的価値が高いとみなされる風潮が存在し、質的・個性記述的研究の理解と普及を妨げている。質的研究は、現象の深い理解が可能であるものの普遍性の追求は困難を伴う。一方、量的研究は、信頼性や再現性に優れるが新しい文脈や異なる条件下に研究結果を適用した一般化は出来ない。

交通社会の諸問題解決において、質的研究と量的研究それぞれの強みと弱みを理解し、補完的に活用することで、実務に役立つ知見が導かれることを期待している。

### ●中西誠 (株式会社電脳)

教習車は、道路交通法第71条「初心運転者標識等を表示している車の保護」において、危険を避けるためにやむを得ない場合を除き、幅寄せや割り込みが禁じられている。道路交通社会において、運転行動は道路交通法や一般的な交通の流れに基づいて行われるものではあるが、現実の交通環境においては、法規のみでは捉えきれない他者の多様な運転行動が観察される。このような状況下において、他の交通の流れと異なる運転を行う教習車は特異な存在と捉えられる可能性がある。そこで、路上教習という環境下で教習車が経験する他者からの特異な行為に着目し、それらのエピソードを収集し

体系化することで、運転者教育のための知見として活用できるのではないだろうか。本話題提供では、教習指導員資格を持つ者に対して、路上教習中に経験した他者からの特異な行動(例：意図的な進路妨害、不慣れな運転への配慮等)に関する記述データを収集する方法について報告する。

### ●中野友香子 (科学警察研究所)

筆者はこれまで、効果的な交通安全教育の方法や内容の研究を行ってきた。より具体的には、教育を受ける者の認知・行動変容を促すべく、小集団討議を活用した教育プログラムを提案して、主に量的アプローチから効果検証を行ってきた。量的データの分析結果は、教育プログラムの有用性を明瞭に示すことができるという利点がある。しかし、それだけでは、教育プログラムの参加者の知識や認知がどのようなプロセスで変化し、その変化に教育プログラムのどの働きかけが寄与したのかを示す知見は不足している。また、量的データの分析結果だけでは、具体的な小集団討議の進め方や教育プログラムを応用・発展させる際の方針がわかりにくく、実務に適用する際の資料も不足しているという課題がある。

そこで本話題提供では、筆者が収集した小集団討議中の参加者の発話データの一部を示して、これらの課題解決のために質的データの分析を行うことの有用性を検討したい。

### ●大谷亮 ((一財) 日本自動車研究所)

歩行中の子どもの安全確保のため、筆者はこれまで子どもおよび保護者対象の安全教育や、保護者による歩行中の子どもの監視について、観察調査やアンケート調査等の手法を用いて検討を行ってきた。以上の研究では、子どもの道路横断行動や知識の変容、さらには保護者の意識の変化や監視の影響要因を定量的検討により明らかにしてきた。一方、子どもの交通事故の更なる低減のためには、平均値的な対策だけではなく、きめ細かな対応が必要と考え、これに資する資料を得るために、保護者対象の面接やアンケート調査により、生活世界の子どもの安全教育や保護者の監視、さらには子どもの飛び出し事象の様相について調査を始めている(大谷, 未刊行)。今回の話題提供では、これまでに得られた質的・個性記述的研究の結果の一部を報告するとともに、交通社会の諸問題を解決するための質的・個性記述的研究のアプローチの方向性について情報提供を行う。

## 【参考・引用文献】

宇留野藤雄. (1972). 改定 交通心理学 技術書院.  
大谷亮. (未刊行). 歩行者事故低減を目的とした子ども用教育ツールの開発と普及に関する研究. 2024年度一般社団法人日本損害保険協会自賠責運用益事業(研究事業)報告書.  
大谷亮・小菅英恵・中西誠・中野友香子. (2023). 社会に役立つ応用心理学研究を考える-道路交通社会を例とした貢献と課題-. 日本応用心理学会第89回大会自主企画WS⑥.  
大谷亮・小菅英恵・中西誠・中野友香子・横井川美佳. (2024). 交通社会の諸問題を質的・個性記述的に解決する意義と方法. 日本応用心理学会第90回大会自主企画WS①.

(おたに あきら・こすげ はなえ・なかにし まこと・なかの ゆかこ)